

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

# SAMPLE Shoshi-Sh

維摩經入門釈義

加藤咄堂著



書肆心水

目 次

序 説 ···

I

仏國品第一  
方便品第二  
弟子品第三  
菩薩品第四

II

文殊師利問疾品第五  
不思議品第六  
觀衆生品第七  
仏道品第八  
入不二法門品第九  
香積仏品第十

III

菩薩行品第十一  
見阿闍佛品第十二  
法供養品第十三  
囑累品第十四

344 334 322 304

283 256 239 218 203 176

138 86 70 22

11

# SAMPLE Shoshi-Shoin.com

一、本書は加藤咄堂著『維摩經講話』（一九四〇年、大東出版社刊行）本文の再刊である。維摩經の読み下し和文に対応する漢訳文と註は省いた。また、意訳が示されている漢文一箇所も省略した。

一、「維摩經講話」と題する書籍が他にも複数存在するので、それらと区別するために、また本書の特徴をよりよくあらわすために、本版では「維摩經入門釈義」と改題した。

一、I II IIIの部分だけは本書刊行所が設けたものである。

一、読みやすくなるように左記の表記変更をおこなった。なお、同義の異字は（人名の場合を除き）統一せずそのままに表記した（例、偏と遍）。

一、平仮名表記を多くした。

一、句読点を加減調整した。

一、送り仮名を現代風に加減した。

一、傍点の形状は統一して表記した。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

維摩經入門  
釈義

SAMPLE  
[Shoshi-Shinsui.com](http://Shoshi-Shinsui.com)

## 凡例

一、維摩の一経、義深くして旨遠し、その奥底を究め、その玄微を悉すは、到底浅学予の如きものの企て及ばざる所、ただ多年この経に親しみ、その文を辿りてその義を推し、いささかその万一を髣髴せしめ得べきを念い、自ら揣らず通俗平易に講解を試みて初めてこの経を読む人々の階梯たらんとしたるのみ。文の皮相に流れ、義の浅薄に失したる、多くこれに因す。読者請う、その婆心を諒として深く咎むるなかれ。

一、予つとに維摩の文を愛し、自ら読むこと數十回、他のために講話することまた一再にして止らず、読むに従つてその義の深きを想い、講ずる毎にその旨の遠きを感じず。まことや王世貞のいわゆる変幻出没得べ端倪すべからざるの文にして、天台大師のいわゆる理致深遠にして言旨淵玄なる経たり。予のこの講話はわずかに予の今日の力にて見得たる所のみ、その維摩の真相と相距るすこぶる遠きやも知るべからず。読者これを階梯として、さらにこれを心読し、堂に入り室を叩いて維摩と方丈に相会するあらば、予の光榮何ぞこれに過ぎん。

一、維摩の註疏、古来その書に乏しからず。羅什、僧肇そうよ、道生等の註維摩經十卷、天台大師の広疏二十八卷を初めとし、註に註を生じ、疏に疏を加え、予の一覧したるのみにても數十部の多きに達す。本書はその繁を避けて簡を旨とし、主として註維摩經により、これを窺うの利器としては、道液の註維摩日講左券と鳳潭の註維摩發蒙抄とを用い、かたわら湛然の維摩經略疏とその註釈たる孤山の垂裕記に拠り、時に嘉祥大師の略疏ならびに伝灯の無我疏を参酌し、科段は全く聖德太子の維摩經義疏に従いて講述したものにして、大意古人の意を害せざらんことを努めたりといえども、間々瓦礫の如き愚見の金玉の中に混ずるなきを保せず。読者請う諒せよ。

一、本經の骨子たる不二法門品は比較的これを精叙し、かつ維摩の默然として語なきの一境に至っては、不立文字

の禅と交渉すること少からざるを以て、殊に碧巖集、從容錄を持ち来たりてこれが説明に充て、以て読者の言外にその意を領せられんことを努めたり。こもまた講者の婆心に外ならず。

一、予の本經研究はこの講話を以ておわるにあらず、さらに深くその玄に入り一面諸宗派との交渉を尋ね他面においては歴史的にその製作年代を究め、この大小乘過渡期の經典を中心として諸經を見んとす。読者もまたこの講話によりて維摩を知了せりとせず、共に歩武を進めらるるあれば幸殊に甚し。

一、本書の述作に対しては大内青巒先生ならびに島地大等氏の指教を受けたることすこぶる多く、かつ成田図書館がその所蔵の書を貸与せられたるによりて便宜を得たること少からず。併せ記して謝意を表す。

一、本書を初めて世に公にせしより三十年を経過し、その述作を助けられたる先輩友人ことごとく幽明境を異にし、今本書を改訂刊行するに当り、感慨特に深し。ここに旧版刊行に際して寄せられたる願詞、序跋を掲げてその芳志を永遠に伝う。  
(願詞・序跋は書中「書肆心水」掲載)

己卯初冬、山茶花開く代々木の村莊

著者識

SAMPLE  
Shoshi-Shinsu.com

## 序 説

維摩経は仏教經典中、出色の文字で、その文章の雄渾にして、その譬喩の妙巧に、その結構の戯曲的なる、単にこれを文学的作品として見るも上乗なるもの、いわんや、その説く所の玄妙にして、その含む所の旨深き、他に多くその比を見ることのできないものである。それであるから、多くの經典中、この經は殊に文学者に喜ばれて、詩人や、学者が、この經によつて仏教の門に入ったものは少なくない。宋の張元亮は、熱心な儒学者で、つねに仏教の隆盛を腹立たしく思い、無仏論を稿してこれを攻撃せんとし、机に向つて筆を執らんとした時に、妻の向氏は傍にありて、既に無仏というこれ仏なきなり、何が故に殊に無仏論を稿してこれを攻撃せんとすると詰つたので、その稿を止め、後に、この維摩經を読んで、初めて仏教の旨深きを感じなるほど仏教の所説大いに儒教に過ぎたものありと、妻向氏はこの時に当りて何が故に無仏論を稿せざるというたので、悟る所があったというようなのはその一例で、有名な詩人の王摩詰の如きはこの維摩に私淑して、自分の名は王維、字は摩詰とつけた位である。それにこの經のもつぱらこれらの人々におこなわれたのは、經典の多くは、仏菩薩の説であるのに、この經のみは維摩詰という在家の一居士すなわち俗人の説いたのであるから、よほど他の經典と趣を異にして、在家の人々には親しい所があるようになぜられる。それに、その教理の方を見ると、八面玲瓏、人に与えて見せしむで、華嚴の方からは華嚴流にこれを見ることができるし、三論の方からは三論流にこれを見ることができ、天台の方からは天台流、禪宗の方からは禪宗流という風に、何れの宗旨からも、自由に解釈することができるのであるから、この經の解釈は古來その数、殊に多く、先ずこの經の訳者たる羅什ならびにその門下たる僧肇、道生等の註を集めた註、維摩經を初め華嚴の方では法銑の維摩經疏、というのが六卷あり、三論の方では吉藏すなわち嘉祥大師の義疏六卷略疏五卷外に淨名玄論八卷あり、天台の方

に至つては天台大師が隋の煬帝のために講ぜられた維摩經、広疏、二十八巻ならびに維摩經、玄義、六巻あり、荊溪の湛然が廣疏の旨を節略した維摩經略疏十巻あり、その他智円の垂裕記とか湛然の疏記とか、道液の註、維摩日講、左券、明の伝灯の無我疏、揚起元の評註等ありてほとんど枚挙にいとまあらざるほどで、日本においては、聖德太子みずからこの經を註したまいし維摩經義疏三巻を初めとし、華嚴の凝然はこの太子の疏をさらに註して維摩經疏、菴羅記四十巻を著わして、その詳を尽し、この外、鳳潭の發蒙抄など世に用いられ、おののおのの見る所によつてこの經を解釈する。殊に我が国においては、斎明天皇の二年内大臣藤原鎌足が病氣であった時、百濟の尼法明が、天皇に奏して維摩經は維摩の疾を問うによつて大法を説いたのであるからこの經を大臣のために誦せんと請い、勅によつてこの經を誦し、また誦し終らざるに疾が癒えたという因縁で、藤原氏の創立にかかる興福寺において維摩會なるものが設けられ、盛んに海内の碩徳を招いてこの經を講論せしめたことがあり、後にはこの維摩會は勅命のもつとも大切な儀式となり、従つてこの經はすこぶる世におこなわるに至つたのである。

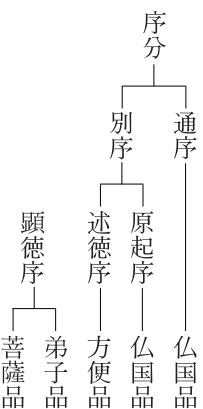
さてこの經は古來六訳と申して、その翻訳に六通りある。第一は單に維摩經というのが二巻、これは後漢の居士嚴仏調の訳で、これを古維摩經といつてゐるのであるが、惜しいかな、散逸して今は伝わらぬ。その次は吳の支道謙の訳した維摩詰不思議法門經。これは現存しているが、その次の西晋の竺法護の訳した維摩詰所說法門經と、同じく西晋の竺叔蘭の訳した維摩詰經とは伝わらぬ。それから最も多くおこなわれてゐるのが姚秦の時代に鳩摩羅什の訳した維摩詰所說經で、今回ここに講ずるのも、古來の高僧方の註釈せられたるものこの訳本である。この外に唐の玄奘の訳した無垢稱經というのも現存しておつて、つまり六訳の中、三種は欠けて三種は存しているのであるが、今いう通り、この鳩摩羅什の訳がもつとも能くおこなわれてゐるので、その文もまた他に比して優つて居るということである。この鳩摩羅什といふのは、西域龜茲國の人で（今の新疆省庫車）姚秦の時代に支那に来て、國師として待遇せられ、国王の離宮ともいふべき終南山の逍遙園といふ所にあって、法華經だの、この維摩經だのを始めとして八百余巻の經論を翻訳した高僧で、この維摩經の翻訳については、羅什の弟子の僧肇の書いた維摩經の序文の中に、

弘始八年、丙午の歳、大將軍常山公、大將軍安成侯と義學の沙門千二百人とに命じ長安の大寺において、羅什法師を請して、重ねて正本を訳せしむ。

とある、弘始八年は姚秦の第二世姚興の時の年号で、日本の反正天皇の元年西暦四〇六年に当る。姚秦の帝王たる姚興はその一族たる常山公や安成侯などに命じ、かつ高僧ともいわるべき人々千二百人を長安の大寺すなわち遣遙園の艸堂寺というに集め、この羅什法師を請待して、重ねて正本を訳せしむとあるのは、この維摩の翻訳は先きに呉の支道謙の訳や、竺法護の訳があつてその頃に伝わつておつたのであるが、さらに正しき原本について翻訳せしめるということである。かくの如く鄭重にして訳されたのである。この訳の他の訳に優っているということが明らかである。この經の訳者羅什はこの經訳後七年、弘始十五年四月十三日、七十歳の高齢を以て入寂せられた。

さてこの經の經はいかなる結構であるかというに、全部十四品に分れて、最初に仏国品というのがあつて、仏が或る時、毘耶離城の菴羅樹園という所で説教をしてござると、ここへ宝積ほうしゃく長者の子が五百の長者の子と共に、おののお手に天蓋を持つて、これを仏に供養して教えを請うたのにはじまりて、仏は仏国の莊嚴を示し給い、心淨ければ仏土淨しの説法となり、次の方便品に至りて、本經の主人公維摩詰を出し来たり、この維摩が方便を以て身に疾あるを示し、見舞に来る人々を捕えては、法を説く。ここにおいて仏もまたその弟子を遣わして疾を問わしめんとしたまうのが第三の弟子品で、ここは舍利弗、目連を初め仏の十大弟子にその使を命ぜらるるが、何れもかつて維摩のために論破せられたことがあるがために、おののおのその因縁を述べて、これを辞退する。十大弟子ならびに五百の大弟子達がみな行かないものであるから、第四の菩薩品となつて、仏は弥勒菩薩を初めとして八千の菩薩に命ぜられたが、これもまた到底その任に堪えずとて辞退して誰れ一人行くものがない。そこで終に文殊菩薩に命ぜらるると、文殊は承知して出かける。これが第五の問疾品、一方に維摩大居士、一方は文殊大菩薩。この問答は、正にこれ竜虎の相対するが如く面白かろうといふので、多くの菩薩ならびに仏弟子達もみなゾロゾロと付いて行く。ところが維摩居士のいる室は方丈といふて一丈四方、ちょうど四畳半位の座敷であるから、この多くの人を入れることはできない。ここで維摩

が不思議を現わして須弥<sup>しゆみとう</sup>灯王仏の須弥灯国より高さ八万四千由旬（一由旬は約四十里に当る）という広大なる高座を三万二千程借りて来て、この小さな室中に入れ、ここに須弥山を芥子中に入れ、大海水を毛孔内に入るという面白き所説があるのが第六の不思議品。次の第七観衆生品と第八仏道品とは、維摩が滔々懸河の弁をふるつて衆生といえるも、実人にあらず、幻師が幻人を見るが如きぞと説き、一切事物ことごとくこれ仏道の旨を説きて、大乗仏教の要旨を示し、その間に天女と舍利弗の問答などを点綴して波瀾あり曲折あらしめ終に仏教の極致たる不二の理に入つたのが第九の不二法門品、ここでは諸菩薩方おののおの自己の見解を以てこの不二の理を説き最後に文殊菩薩に至つて、不二の妙たる、口、いうべからず、舌、説くべからずとて、無言無説、無示無識というに対し、維摩はこれなお言舌に落つとて、黙然として語なきの状を示した。この維摩の一默声雷の如しで、多くの菩薩の冗舌多弁、否、文殊の無言無説といえるさえ、維摩に及ばざること遠きを見る。さてかかる問答の中に、食事の時刻となつた。この時、維摩はまた不思議を現わして、香積仏の衆香国より香飯を受け来たつて、これを会衆に与えた。これが第十の香積品。さてその次の第十一の菩薩行品は、維摩が方丈を出でて、文殊と打ち連れて菴羅樹園にござる仏の所に至るので、第十二の見阿闍<sup>アハ</sup>併品は、維摩の本拠を示したまうので、第十三の法供養品と第十四の嘱累品とは、この経の流通を示したので、この十四品について、場面を分かてば、第一の仏国品より第四の菩薩品までは、菴羅樹園の場、第五の問疾品より第十の香積品までが維摩方丈の場。それ以下はふたたび菴羅樹園の場で、一曲三場の観がある。さてこの中でもとも主要なるのは方丈の場で、これと第十一の菩薩行品と、第十二の見阿闍併品の幾分を正宗分とし一経の眼目とし、その前の四品は序が、なかんずく第一の仏国品は通序というて、まだ主人公維摩を出し來たらざる序幕のようなもの、終りの二品は流通分で、一経の結辞とも見るべきである。けだし一經を序分、正宗分、流通分の三段に分けて見ることは、仏典註解の通則で、この三の区分によつて一経の主旨を知るに便するのである。今、ここに聖徳太子撰述の維摩經義疏によつてその科段の大要を示すと、



仏国品の初めの方は通序で、爾時毘耶離城有長者子という以下が別序になつてゐる。



見阿闍仏品の中の終りの仏が舍利弗に告げて、汝この妙喜世界及び無勝仏を見るやといいたまう所からは、流通分の方に入る、そこで、



という風に分けてある。このことは後に本文に入つてお話をする時に詳しく述べるのであるが、一応本經の結構を知つ

て置く必要があるから、ここに大要を示したのである。

一経の結構はほぼ上述の如くであるが、そもそもこの経は仏教の上にいかなる地位をもっているかというに、一体仏教には大乗と小乗との区別があるて、小乗はその名の如く小さい乗物で、自分さえ渡ればそれでよいという風で、他を利用し他を済うという大きな考えはなく、その趣く所の悟りも、灰身滅智というて、火の消えたような寂滅の境に入るので、大乗というは自分ばかりでなく、他をも済度して共に悟り、彼の岸に趣くという大きな乗物で、その趣く所も、小乗の如き灰身滅智の境でなくて円寂の境で、応用自由、攝化縦横の所であるというのが、先ず一応の大乗、小乗の区別で、歴史的にいえば小乗は原始仏教、大乗は発達したる仏教ともいえるので、とにかく大乗の教理は小乗よりも、高くかつ深い。この高くかつ深い大乗の見地を以て小乗仏教の見地を叱斥したのが、この維摩経であるからこの経の明かす所は大乗仏教で、維摩なる一居士は利他の方便を以て疾<sup>やまい</sup>を示して、衆生攝化し、仏弟子達のこれを見舞うのを辞退したのは、かつて維摩のために、その小乗の見地を叱斥せられたからである。されば先きにも挙げた僧肇の序には「維摩詰不思議は、けだしこれ微を窮め、化を尽す、絶妙の称なり。その旨淵玄なり、言象の測る所にあらず」とい、その明かす所を示して、「この経の明かす所は万行を統<sup>トナメ</sup>ぶるときは、すなわち権智を以て主となし、徳本を樹ることは、すなわち六度を以て根となし、蒙惑を済うときは、すなわち慈悲を以て主となし、宗極を語ることは、すなわち不二を以て門となす。およそこの衆説はみな不思議の本なり」とあるし、天台大師の「維摩経玄義」の劈頭には「この経、理致深遠にして言旨淵玄なり、もしただ文に依りて怙<sup>ハシマ</sup>せば、恐らくは事数に止らんのみ、一教の宗極、終に自ら量り難し」というて、文字の末に捉えられず、これを自己の心に照らして読まねばならぬという風にいわれている。これらの語によつても、この経の仏典中に重きをなすゆえんが解る。それに大乗の見地によりて小乗を叱<sup>ハシマ</sup>した大小二乗過渡時代の經典であるから、仏教の歴史的研究を企つる人々にもまた必須の經典で、この経が何年頃にできたのであろうという研究は、よほど興味あることで、この種の専門家は多くの大乗經典は仏滅後六百年代の龍樹菩薩以後の產出であるというのであるが、この維摩経の文句は、その龍樹の作った大智度論の中に引用せら

れているということで、確かに竜樹以前よりあつたものであるということが明らかである。これらの関係から、この経の研究はすこぶる興味のあることであるが、今は一切それらの専門的研究を止めて、ただ一般の人々に解しやすくこの経を説こうとするのである。しかしもともと高尚幽遠な教旨であるから、浅学菲才の私が解しやすくこれを説くというのは、至難なことで、維摩居士、もし今日におつたならば、私は大叱斥をこうむるべきものであろうが、古來の註釈を力にいきさか力の及ぶだけの説明を試みようと思うのである。これもまたこの経弘通の一助であるから、維摩居士もまた黙して許すであろう。

さてここに一つ最も研究を要する問題は、本經の主人公たる維摩居士は、どんな人であろうということである。これはどうもほかに調べるべき者はないので、この経に出ている宝積とか文殊とか弥勒とかないし舍利弗とか目連とかいうのは、他の経にも出ているが、維摩という人物はこの経だけに出ていているのであるから、この経によって見るの外、別に方法はない。維摩詰は梵語で Vimalakirti、漢訳すると淨名というので、玄奘はこれを無垢稱と訳した。無垢といふのも淨というのも、称というのも名というのも、その義は同じで、恒河を隔てて摩訶陀の北方に当る毘耶離城 (Vā-  
isali) という所におつた有名なる長者で、月上経によると無垢という妻、月上という女もあり、善思童子経、大方等頂王経、大乗頂王経等によると善思という男子もあつたようであるし、本經の仏道品には、智度を母とし、方便を父とし、法喜を妻とし、慈悲心を女とし、善心誠實を男とするというようなことがある。畢竟この維摩居士なるものは歴史的実在の人物でなくて、理想的の人物であるということは明らかである。一体仏教には道理や行儀を人格化したものが少なくないので、この維摩の如きも確かにその一つであるに相違ない。されば本經の「阿闍仏品」には、維摩の故郷を説いて「國あり、妙喜と名づけ、仏を無動と号す。この維摩詰は、彼の國に没して、しかしてここに来たる」とあって、この吾々の住んでいる世界の外に、無動仏という仏のござる妙喜國というのがあつて、そこが維摩の故郷であるが、今は釈迦牟尼仏の布教の手伝いに、この娑婆世界へ出て来たのであるということである。これらが仏教の最も面白い所で、仏教といえば釈迦牟尼仏のみの専有で、仏弟子でなければ、この教は持つて居らぬように思う迷執

を破して、真理は到る所にあり、釈迦出でざるも真理は真理、仏弟子でなくとも、僧侶でなくとも、真理を体得した人はこれ立派な仏教者であるという自由包容の思想で、仏弟子以外、僧侶以外に一俗人たる維摩をして出し来て、釈迦仏以外の無動仏なるものを持ち来たりて、真理の決して私すべきものでなきを示し、この維摩をして仏弟子を叱斥し、菩薩を呵責して隨意にその所説を示さしめた自由討究の思想はこの一經の結構の上に現われてゐるのである。さればこの經を読むものは文字に捉えられて、その真趣を失うことなく、直に心を以て心に読みて、この經の真意を解せねばならぬ。この居士の名たる淨名という二字については、宗鏡録に淨の字を解して「すなわちこれ一切衆生の自性清淨心なり、この心は澄まさざれども、自ら清く、磨かざれども、自らかがやき、凡に處しても垢つかず、聖にあっても淨からず、故に自性清淨という」とあり、名という字については「いう所の名とは、心は形なく、ただ名のみなるを以ての故に」とある。さればこの淨名といふは、吾々お互の本来天然に具えている自性清淨の本心のことで、何も遠く無動仏のござる妙喜世界に求めるにも、インドの毘耶離を探すにも及ばぬ、近く吾々の本心の上に維摩居士は厳然として控えているのではないかろうか。この見地を以てこの經を読むと、一經の面目生氣激刺として吾にせまるものがある。されば聖徳太子の義疏にはこの維摩について、「維摩詰とは、すなわちこれすでに正覺に登るの大聖なり。本を論ずれば既に真如と冥一なり」というて、その本の宇宙の真理たる真実如常の本体たる真如と一つであるといふ、この真如の都より迹を垂れて志、益物に存し、大慈悲息むことなく衆生濟度のために疾<sup>やまい</sup>を示してゐるのであるということを示し、「維摩詰とはこれ西國の音、秦には淨名といふ。和光同塵すれども、衆累の染むる所たらざるが故に淨名と称するなり」とあって、その真如の都より迹をこの世界に垂れて光に和し塵に同じておらるるが、そのためには少しも垢れに染むことがないから淨名といふのだと示されてゐる。ここにも吾們の考うべき要点がある。吾們の心いかに淨くとも、ただ淨きのみを守つて、少しでも他のものに触れると垢れるようでは、まだ眞に心の淨いものとはいへぬ。吾々の心は鏡の如くで、鏡が曇つてゐるのは本来ではない。これは是非明らかでなくてはならぬが、ただ明らかなのみで、毫も物を映すといふことがなければ、鏡たるの機能はない。鏡の能く万象の影を映して、しかも自ら少

しも垢るる所がないように、吾れらの心もまた能く和光同塵して、しかも少しも垢れる所がないようにせねばならぬ。維摩居士は迹をこの世に垂れ、妻子あり眷属ある身を以て、そのために少しも累せられず、能く大法を宣伝する。ここが大乗の大乗たる所で、彼の小乗の独り自ら淨うするのとすこぶるその趣を異にしている。序弁が大分長くなつた。でこれより経の文句についてお話をすることとしよう。

この文句に入つて話をする前に、第一にいわねばならぬのは、「維摩詰所説經（亦名不可思議解脱經）」という表題のことだ。題は一部の総標で、仏教の經典は、その表題によつて充分に内容の表われるようにならねばならぬ。確かに六字の表題だが、天台大師はこれを詳しく解釈するために維摩經玄義六卷を著わされた位で、この題だけでも詳しいれば、なかなかむずかしいのであるが、今はただその字義だけをいうとこの六字の中、初めの三字はこの經の主人公たるもの名で、この主人公たる維摩が説いた御經であるという外に意味はない。もちろん、この經は維摩のみの説ではなく、仏の説法もあれば文殊の説もあり、その他菩薩方や弟子方の説も多いのであるが、主人公が維摩であり、かつこの經の終り嘱累品の所に仏が「この經を名づけて維摩詰所説となす。また、不可思議解脱法門と名づく」とあるによつて、經題としたので、維摩詰所説經というたのは、これを説いた人によりて題としたので、また不可思議解脱經と名づくるのは、仏国品の初めより嘱累品の終りに至るまで、この經の示す所は全く不可思議解脱にあるから法に依つて題としたので、嘉祥大師の疏の序には、「維摩詰とはその人を尊ぶなり、不思議解脱とはその法を重んずるなり」とあり。經というは梵語で修多羅といい、直訳すれば貫線の義で、花や玉などを糸で繋ぐ意味だといふことで、宇宙万象さまざまものを道理の一線で貫くというのがこの本義であるということ、支那の方でいえば經は常なり經なりとあつて經をいうのは機の堅糸（たけいし）を指すので、常というのは何時も変らざる法則、それであるから聖人の説かれたものを詩経だの書経だのといふ。今ここに經というも、これと同義で先聖後賢相承けて異らざるを以ていうのである。仏教には三蔵というて經、律、論の三がある。經は仏の教示で、律は仏の命令、論はこれに対する説明とも見るべきものである。今、この經は仏の直接の教示は少ないが、維摩の所説を仏の許されたものであるから、仏の

教示と同じくこれを経としたので、旧訳の維摩經の中には、頭に仏説と冠したのもあり、玄奘の訳には単に説の一字を冠しているが、この經の大部分はやはり維摩居士の所説であるから、ここには維摩詰所説經としたのである。表頭の話はこれ位にして、直に本文に入ろう。

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ss

m

I

## 仏国品第一

この仏国品は玄奘の訳には、単に序品というてある如く、一經の序に属するものであるが、この品においては、宝積が天蓋を上つて、仏、これによつて諸仏の淨土を現じ、広く菩薩淨土の行を説きたまうが故に、仏国品といふので、羅什は經の終始仏国による故に仏国を以て篇に冠すとあるが、聖德太子の義疏によると、この經の序分に属すべき者は、この仏国品の外に、方便品、弟子品、菩薩品とあつて、四つもあるのであるから、事に随つて別名を立てて仏国品と名づけたのだという考え方で、「宝積蓋を献じて十方諸仏の淨土を顯わし、広く菩薩淨土の行を説く、故に仏国品と称す。もし余經の如くならば序分というべし。しかしてこの經の序事一にあらず、凡て四事あり、事に随つて別名を立つ、故に独りこの品のみ序品というべからず」とある。この仏国品の初めの方は、この經を説かれた時と説き主と説かれた所とその聴衆とを示したので、いづれの御經にもこれだけは具わっているので、一には如是、二には我聞、三には一時、四には仏、五には在所、六には同聞、これは次にもいうが仏が御經を説くには必ず六成就ということがあるので、今はこれを書いたのであるからこれを通序とし、宝積が出て来てからを別序とするのである。

一 かくの如く我れ聞く。一時、仏、毘耶離菴羅樹園にましまし、大比丘衆八千人ともと俱なりき。菩薩三万二千あり。

さて何れの御經にも、みな初めには如是我聞とある。かくの如く我れ聞く。このかくの如くとあるのは、これから示す通りに、我れすなわちこの經を誦出したものが聞いたというのだ。伝來の説によると、一切の仏經はことごとく仏滅後、第一結集の時に、常に隨侍しておった阿難が誦出したものとするのであるから、この維摩經もまた阿難がそ

の聞いた通りを誦出したので、かくの如くというは、この通りで、少しも私意私見を加えず、仏のおおせのままとうことで、絶対に信仰したかたち、しかし同じ説法でも聞く人の機根によって、いろいろの差を生じて、なかなかかくの如くに説かれたことを、かくの如くに聞くということはむずかしい。昔、或る歌人が五月雨に降り閉じられて片田舎に滞在しておった折りに、その宿の男が「五月雨に年中の雨ふりつくし」という句を詠んだ、その歌人は大いに感心して、さても名句ぞ、五月雨には夏の雨の如くに、激しく降る時もあり、または春の雨のように細く、しめやかに降る時もあり、あるいは時雨に似、あるいは冬の雨にも似ている。なるほど年中の雨降り尽くしだというと、その男、いえいえそんなむずかしいことを考えて咏んだのではござらぬ。あまり雨が降るからこれでは一年中の雨がなくなるだろうと思うたのであるというたので、その歌人もすこぶる興さめたという話がある。これは咏んだ人よりも聞きての上手であったのであるが、もし此の反対に聞きてが悪かった時には、せつかくの名句も解ろうはずはない。仏の御説法が如何に立派であつても、もし聞きようが悪くては、仏を罪することとなる。そこでかくの如く我れ聞く、こう私は聞いたといるのは、誦出者の謙遜、仏に対する敬虔の念から出たものと見ることが出来る。僧肇いう「如是は信順の辞なり。それに信なればすなわちいう所の理、順なり。順なればすなわち師資の道成す」と。羅什いう、「もし聞くといわづんば、我れ自ら法なり。我れ自ら法あれば、すなわち情に所執あり。情に所執あれば諍乱すなわち興る。もし我れ聞くと云えば、すなわち我れに法なく、すなわち所執なし。得失是非、所聞に帰す」と。すなわち我執を棄ててかくの如くに仏の法を聞く、これ仏教を聞くものの第一に心得ねばならぬことである。吾れらは果して能くかくの如くに聞くことができるであろうか。

一時というは或る時というようなこと、これを詳しくいえば、説きてと聞きてと機縁相熟して相遇うた時、その某年某月といわざるは、十方の時分一ならず、両土の正朔同じからざるが故なりなぞといいう人もあるが、何にもそうむずかしく考えなくてもよい。仏の毘耶離の庵羅樹園にいましてこの經を説きたまう時のこと、毘耶離は先きにもいう通り摩竭陀の北の方に当る地方で、これを意訳すると広嚴という義で、その地、平広莊嚴であるといい、唐訳には

存稻城というて稻のよくできる地方だともいう。とにかく豊饒の地である。菴羅樹というのは、桃のような、好い果実のできる樹である。いま仏はその木の葉茂れる下で、大衆のために説法をしてござるのである。風光明媚の毘耶離城、その菴羅樹園においての御説法、聴衆の数はすこぶる多い。大比丘衆八千人、菩薩三万二千、これはみなこの経の誦出者たる阿難と共にこの経を聞いた同聞衆で、これを挙げて、我が聞いた所の謬りなきを示す。比丘というは梵語で、支那に訳すると淨乞食と破煩惱と淨持戒と能怖魔との四義がある。かくの如く多義なるが故に訳せずして原語のまま比丘というたので、仏の弟子となつてゐる、勝れた坊さん、しかしこれは小乗のお方だ。菩薩というのは、これも梵語、詳しくは菩提薩埵で、支那に訳すると覺有情となる。上、菩提とて悟りの道を求め、下、衆生を化して行くという大乗のお方である。これで説きても聞きてても揃うた。これらの人々、ならびに後に挙ぐる万の梵天、万二千の天帝、及び天龍八部、諸比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等は、後に文殊と維摩との問答の時に、文殊に従つて維摩の方丈に赴く連中で、この外にもなお多くの聴衆があつて、無量百千の衆、仏を囲んで法を聞いておつたが、これらは菴羅樹園に止つて、方丈へは行かなかつた。そこで先のを方丈衆とし、後のを菴羅衆とするのが、聖徳太子の見解である。

衆の智識するところなり。大智本行、みなことごとく成就し、諸仏威神の建立するところ、法城を護らんがために、正法を受持し、能く師子吼して名十方なに聞こゆ。衆人請わざれども、友としてこれを安んず。三宝を紹隆して能く絶えざらしめ、魔怨を降伏して、もろもろの外道を制す。ことごとくすでに清浄にして、永く蓋纏を離る。

この経は前にもいうた如く、小乗の執を破して大乗の教理を顕揚するを主眼とするのであるから、ここで大乗の菩薩の徳を讃歎して眞実の仏教徒たるものはかくの如くならねばならぬとて、小乗の比丘を抑えるのである。衆の智識する所というのは、この菩薩は、世界において誰知らぬものはないということ、大智本行みな成就せりとある。大

智というものは菩薩の智慧の広大なるを形容したので、その広大の智慧も成就し、その菩薩の本分としておこなうべきことは、みなでき上っている。かつその大智本行はみなこれ諸仏、威神の建立する所とて、十万三世一切の諸仏が威光ある不思議の力を添えて成り立たせたので、決して衰えることもなく、損ずることもない誠に堅固なもので、法、城、と仏法の城を護らんがために正法とて正しき法を受け持つて、その正しき正法を説き明かすこと、あたかも獅子が吼えて百獸が潛伏するように、すべての外道や惡魔は驚き怖れて、その威を振うことはできない。かかる様子であるから、その名は十方に聞こゆで、誰れも知らざるものではなく、名声噴々だ。しかも自ら足れりとせず、一切衆生のためを思うて、一切衆生から頼まれもせぬのに、進んで一切衆生の友となりて、これに慰安を与える。これを衆人請わざれども、友としてこれを安んずというたので、請われ頼まれてするのは眞の菩薩の仕事じやない。請われず、頼めずとも、一切衆生を愛する大慈悲の心から進んでその世話をする所に、菩薩の勝れた所はある。僧肇いう、「真友は請うを待たず、なお慈母の嬰兒に赴くが如し」で、眞の友となるのには、この不請という所にありがた味はある。次の三宝を紹隆して能く絶えざらしむとある三宝は、仏、法、僧の三で、これは仏教の宝とする所で宇宙真理の異名と見てよい。これに同体、現前、住持の三つあって、同体三宝の見地よりいう時は、仏というのは宇宙同一の理で、法といいうのは万象差別の則、僧といいうのは万物の互に調和している所で、これを哲学的の語でいえば、同一、異別、調和の三大原理となる。宇宙万象はその体をいえば、みな同一、その相をいえば、みな異別、しかも異別のものが、相互に持ちつ持たれつして調和しているのが宇宙の妙用であるから、この三、三にして一、一にして三なる宇宙の真理である。これを体得して吾れらに示したまうが現前の仏、この仏の説かるるのが現前の法、親しくこの現前の仏に就きて、この現前の法を聞き、その如くに修行して行く仏弟子はすなわち現前僧である。その仏法僧の有様を後の世に住め持つのが住持の三宝というので、それは木仏金仏の仏、黄巻赤軸の御經が法、円頂方袍の人が僧というようになるのであるが、今は仏在世であるから、もっぱら同体、ならびに現前の上でいうたので、この三宝を興隆して絶えざらしめ、この三宝の敵たる魔怨を降伏し、もろもろの外道を制すで、魔というは、梵語で魔羅まらというのを略したので、翻